

香港では「神威」に対し毎日空爆があり、ドックも破壊されたので修復の見込みもなく、港外に出て無人のまま爆撃で海底深く沈没していきました。

もうそれからは乗り込む艦も無く文字通り「岡に上がった河童」で、壕掘りに汗を流す日々。ま八月十五日の終戦を迎えました。

捕虜として五カ月余を過ごし、昭和二十一年一月二十五日、英国船で鹿児島へ引き揚げ、貨車等を取り継いで、一面銀世界の「西田中」で下車、積雪三尺の雪道を踏みしめて帰宅したのは二月五日でした。

僅かに二年一カ月の軍隊生活ながら、死の地獄から何度も逃れ得たのは、神仏のご加護だけでなく、尊い命を投げ出して私たちを守って下さった英霊であることを、永遠に忘れてはならないと思います。「平和の礎」となられた英霊に、心からご冥福をお祈りし、悲惨な戦争を二度と起さず、恒久の平和をお誓いして筆を止めます。

我が戦跡を顧みて

石川県 畑 松 大

昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争勃発の詔勅を拝したのは、パラオより輸送船団を指揮する第三艦隊旗艦軽巡洋艦「長良」が比島東海岸に向かって航海中のことでした。払暁、たいた砲戦も見られず、肅々として任務が遂行されていきました。その時、山田一等飛行兵曹は偵察の任務から着艦したのですが銃撃に遭い、一命を失い戦死となりました。彼の往時の勇姿が私の脳裏をよぎり、戦場の常ながら無常の風にさらされ、幾度となく胸が締め付けられる思いでした。

同兵曹の遺体は軍艦旗に包まれ、上甲板にて水葬の儀礼が営まれました。このときを最後に、その後はこのような軍艦旗に包み、ラッパ吹奏による水葬は見られなくなりました。

その後私は、艦内では燃料係りとして、毎日の

厳しい日々が続きました。この間現在、福井県大野市在住の慈愛に満ちた金森茂班長のご恩は生涯忘れることは出来ません。「利根」「長良」「玉波」「一〇八」と乗艦しましたが、最後まで、どの艦に乗り組んでも燃料係りとして勤務したのも不思議だと思えます。

私は少年時代、東京の下町の本所で新聞配達をしながら夜学校にも通った苦しい経験にも耐えてきた自分ではありましたが、軽巡洋艦「長良」は精神的にも体力的にも地獄さながらの苦しい勤務で、とうとう、予期しない病が自分に降りかかってきました。肺浸潤でした。そして病院船「朝日丸」にて内地に送還され、呉海軍病院にて回復を得た後、今度は新鋭の駆逐艦「玉波」の機装員付を命ぜられました。

機関長の小宮山大尉、その他乗組員には皆よき人たちに恵まれ、この艦こそ我が死に場所と、一生懸命頑張りました。「玉波」の機装が完了後、再度出撃の艦隊訓練が、あの瀬戸の海で始まりま

した。

戦艦「陸奥」の謎の柱島沖沈没事件があったのもこのときでした。当時、「玉波」は最新鋭の計器を装備し、強力な速力を発揮し、無敵を誇る駆逐艦でした。そして私の人生の中でも最も熟し切った時期でもありました。しかもその直後に、あのような悲惨な魔が待ち受けていたのです。誰が予想したでしょうか。

それは瀬戸内海での艦隊訓練が終わらんとするある日、新乗艦者の教育助手として呉軍港に引率し、上陸したときのことです。当時、「筑摩」乗り組みの親友である梁沢君と新鋭の艦の優秀さを誇らしげに語り合っていたところ、呉鎮守府の巡邏隊に機密漏洩を行っていたとして検挙されたことです。

あんなに良き訓導を頂いた機関長や分隊士付きには面目もない有様でした。それに加えて情状を持って以前の肺浸潤の再発ということで、艦隊が横須賀に帰港と同時に入院できるよう好意ある配

慮を注いで頂きました。私は竹森特務下士官、塩尻班長などにも心から感謝しつつ、万感言いようのない胸中を秘めて横須賀海軍病院に入院のため退艦しました。真夏の太陽が異様なまでに舷門を照り付けていました。

静養により心身が回復した後、舞鶴海兵団東兵舎に補給兵の教班長として勤務しました。

世相、戦局は、いよいよ熾烈を極めており、その中で昭和十九年末ごろ、南方補充隊に転勤の命を受けて、マニラ経由でジャワ島ジャカルタ基地に着きました。今度はオンボロの「一〇八号哨戒艇」でした。ここでもまた燃料係りとして油の補給に、水の補給にと多忙な日々でした。機械室、機関室、共に灼熱の暑さでした。

スラバヤ地方の戦況は平靜ではありませんでしたが、いつの日か一転、悪化するか計り知れず、艇は暗雲漂う海峡の哨戒の任務に従事していました

速力は遅いオンボロ艇ですから、海中よりの潜水艦攻撃、上空から敵機に発見されれば、それで

終わりという、平穩ならぬ日々でした。

そうしたある夜、航海中のことです。胸が苦しくなって急いでラッタルを駆け上がり、ハッチに手をかけたまま、ぱったり倒れました。小坂兵長や前川兵曹の「しっかりしろ！」との声だけが、耳の底から遠のいてゆくのみでした。そして何時間かたつて、朦朧もうろうとしていの中で、かすかな意識が戻ったときに、背中の骨が無性に暑くなり、耐え切れない痛みを覚えました。

そして体を横たえている自分のそばで、軍医と看護婦が五、六人立っておられ、軍医が「前川兵曹は今晩限りだ。面倒見てやれ」という声がかすかに聞こえてきました。「ああ自分も、これが最後か」と思い、このときは母や郷里のことなどを思い出す余裕すらなかったのです。

数日後、奇跡的に助かった自分に気がつきました。そしてトリスト療養所において養生することになりました。後になって軍医は「前川、お前の肺は腐っておる」といわれましたが、わずかの月

日で再び、原隊に帰れるとは、全く不思議な体でした。

スラバヤ水上基地に勤務の席を置き、隣接の工作隊に軍刀術の指導に行けるほど快方に向かっていました。

戦局はいよいよ南に北に厳しくなり、我が軍の不利が伝わるころ、水上警備隊の基地では斬り込み隊用の軍刀が製作されていました。乗艦する艦もなく、そこで二十五歳以下の独身者で特攻隊が編成されたのです。名前は「南天特別海軍攻撃隊」と命名されました。長さ六メートルの内火艇に二トンの爆弾を積んで暗夜に乗じて敵艦に襲撃を加えるのです。当時でも電波機器など優秀な兵器がある中で、まことに粗末な攻撃手段と思いつつも、統帥部の命ならばと頑張りました。

そのうち、沖繩の敗北、広島、長崎への原爆投下と、そしてついに敗戦となりました。敗戦の詔勅を聞く折には、再三の咯血で倒れ、詔勅を直接聞くことはできませんでした。

また、その後、捕虜の身となり、見知らぬ外地、シンガポールの街を英軍兵により引きずり回されました。いつたいこの先、何が起きるのだろう、何をしなければならぬだろう、かと、ただただ足が重かった思いがありました。今思うと、肌に汗を生ずる労働に使役された抑留生活、そしてこの満六年の間に四回にも及んで病に倒れましたが、内地に無事帰還した後は、相撲や柔道などの各種団体の競技にも出場し、今日も元気で生きていることが、まことに不思議に思えます。

古の諺に「人事を尽くして天命を待て」という言葉があります。私は次のように思っています。「天命は既に決まっております、ただ、努力あるのみ、後は御仏の教えに従って正しく生きる」と、これが今日このごろの私の処世訓です。

最後に、今日私がこのようにありますのも、戦友たちの尊い犠牲の上に立ってのお蔭と深く感謝しています。祖国の必勝を信じて散り逝きし戦友や諸先輩のご冥福を心からお祈り申し上げます。

海軍軍医大尉吉野彦介氏は、私たちに別れの教として「貴様たちは故郷に帰らざれば、嫁を得なければなるまい。健康で血統の正しい方を選び、親や先祖に感謝の心忘れるな」といわれました。人生八十余年を経て、いまさらながら先生の教訓が身にしみて痛感される今日です。

【解説】

筆者は、大正十一（一九二二）年二月、石川県河北郡花園村に生まれる。家業は農家で、石川県立金沢商業学校を中退して舞鶴海軍工廠に入廠、昭和十四年一月、海軍を志願して合格、昭和十五年六月、舞鶴海兵団に入団する。

昭和十六年二月、横須賀海軍工機学校機関科に入学、六月に卒業する。

主な乗艦経歴は、巡洋艦「利根」「長良」、駆逐艦「玉波」などである。

筆者の体験記は、この軽巡洋艦「長良」など艦隊勤務の労苦体験が語られている。

軽巡洋艦「長良」は大正十年の進水、昭和十七年には、トラック島を中心に機動部隊警戒隊として活躍、第二艦隊水雷戦隊を経て、昭和十八年には第四艦隊に編入されている。

昭和十九年八月、佐世保に向けて鹿児島港を出向し、樺島海域で米潜水艦「クローカー」の雷撃を受けて沈没、長い生涯を終えている。

駆逐艦「玉波」は、昭和十八年藤永田造船所で竣工、舞鶴の第十一水雷戦隊に編入されている。

同年七月、初めての護衛作戦として呉を出港、

「日進」「沖鷹」を護衛してトラック着、昭和十九年四月まで、内地く内南洋間の護衛に任じている。

本格的な戦闘作戦参加は、昭和十九年六月のマリアナ沖海戦参加で、以後、マニラを経てシンガポールに入港、さらに「旭東丸」を護衛してシンガポールを出港してマニラ湾西方沖にて米潜水艦「ミンゴ」の雷撃により沈没する。

これら艦隊勤務の状況を人間関係の面から記述

されている。その中で、機関科出身の筆者は、最後まで機械、機関室勤務であった。

戦局が、いよいよ熾烈を極める折、昭和十九年末ごろ、南方補充隊に転勤の命を受けて、今度はオンボロの「一〇八号哨戒艇」勤務となり、ここでもまた機械室、機関室など灼熱の暑さのなかで燃料係りとして油の補給に、水の補給にと多忙な日々を送ったことを記述している。

そして水上警備隊の基地でも、乗艦する艦もなく、二十五歳以下の独身者で「南天特別海軍攻撃隊」と命名された特攻隊が編成されている。長さ六メートルの内火艇に二トンの爆弾を積んで敵艦を襲撃する。まことにお粗末な断末魔の攻撃作戦を露呈しているのである。

伊十九潜奮戦記

石川県 横山 晋介

昭和十六（一九四一）年五月三日、私は海軍水雷学校における第二期普通科水中測的術練習生の教程を修了し、配乗先は幸運にも熱望していた潜水艦乗り組み四人の中の一人として選ばれた。

配乗艦は四月二十八日に竣工を終えたばかりの最新鋭の「伊号第十九潜水艦」であった。

私は、前年の九月に三等水兵に進級したばかりの若年兵で、半舷や入湯上陸の折、軍帽に「大日本第二潜水隊」のペンネットを付けているので、行き交う古参兵に不審がられ「お前は特三か」と問いかけられたり、帝国海軍始まって以来の「立錨」の潜水艦乗りとも言われた。

乗艦の際、発射管室へのハッチを降りかけたとき、強烈な印象を受けたものは、赤白段だらに塗り分けられた救難ブイで、その表面には「伊号第